

【旧約聖書日課】エゼキエル書 34章1～6節

<sup>1</sup>主の言葉がわたしに臨んだ。<sup>2</sup>「人の子よ、イスラエルの牧者たちに対して預言し、牧者である彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは、牧者は群れを養うべきではないか。<sup>3</sup>お前たちは乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。<sup>4</sup>お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくで、苛酷に群れを支配した。<sup>5</sup>彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりちりになった。<sup>6</sup>わたしの群れは、すべての山、すべての高い丘の上で迷う。また、わたしの群れは地の全面に散らされ、だれひとり、探す者もなく、尋ね求める者もない。

【使徒書日課】使徒言行録 8章26～38節

<sup>26</sup>さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。<sup>27</sup>フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、<sup>28</sup>帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。<sup>29</sup>すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と言った。<sup>30</sup>フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。<sup>31</sup>宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。<sup>32</sup>彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。

「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。

毛を刈る者の前で黙している小羊のように、

口を開かない。

<sup>33</sup>卑しめられて、その裁きも行われなかった。

だれが、その子孫について語れるだろう。

彼の命は地上から取り去られるからだ。」

<sup>34</sup>宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」<sup>35</sup>そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。<sup>36</sup>道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるのでしょうか。」<sup>38</sup>そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。

## 【福音書日課】ルカによる福音書 15章1～10節

<sup>1</sup>徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。<sup>2</sup>すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いました。<sup>3</sup>そこで、イエスは次のたとえを話された。<sup>4</sup>「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回らないだろうか。<sup>5</sup>そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、<sup>6</sup>家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。<sup>7</sup>言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

<sup>8</sup>「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。<sup>9</sup>そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。<sup>10</sup>言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

### 一緒に喜んでください【こども説教のために】

天に昇られた主イエスがお約束くださった聖霊降臨を信じて歩み始めた弟子たちの教会は、いつまでもエルサレムに留まってはいませんでした。

弟子の一人フィリポは、ユダヤ人と長年仲たがいでいたサマリア人の町に行って主イエスのことを伝えると、今度は、南の海沿いの町へと下って行きました。その道すがら、フィリポは、エチオピアの女王に仕える高官に出会ったのです。その人は、エルサレム神殿に礼拝に来て帰る途中で、馬車に乗って聖書の「イザヤ書」を読んでいました。フィリポは、その人のために聖書を説いて教え、主イエスのことを伝えたのです。

弟子たちの教会は、どこまでも広がって行きました。一つ所にとどまらず、今の仲間の集まりに満足せず、出て行っては、新しい仲間を加え続けました。一人の新しい仲間が加わるごとに、彼らは皆、一緒に喜び合いました。彼らの心には、主イエスの教えが満ちていたのです。

主イエスは、食事の席でたとえを語られました。見失った羊を探し出す羊飼いのたとえ。無くした銀貨を見つけ出す女性のたとえ。たった一匹、たった一枚。それは、決して失われてはならない「一」なのです。他の者を置いておいても取り戻さなければならない「一人」なのです。その「一人」を取り戻すことが、どれほどの喜びか。それは、「天」の喜びです。「神の天使たち」の喜びです。主イエスは、それを「一緒に喜ぼう」と教えられたのです。

## 喜んでいるのはだれ？

子どもたちと共に、讚美「小さいひつじが」（『讚美歌 21』200 番）を歌いました。無邪気に遊び歩き、迷子になってしまい、独り悲しみを耐えていた小羊は、優しき羊飼いにを見つけ出され、抱き上げられると、喜び躍り上がった、と歌われていました。わたしたちが皆、「よい羊飼い」に養われ、守られているべき「小羊」のような者なのだと、「聖書」よりも先にこの讚美歌によって教えられてきた者は、少なくないと思います。

詩編 23 編が「主は羊飼い」と宣言するお方を、主イエスも深く信頼なさっていたはずです。何よりも、ご自身が「主に養われる羊」の一人なのだと、お考えになられていたことでしょう。預言者エゼキエルが預言して告げた、反面教師としての「**自分自身を養う…牧者たち**」ではありません。本当に信頼のおける「正しい牧者＝羊飼い」として「主なる神」を見出すことが、「羊」自身にとっても大きな喜びとなることを、主イエスはよくご存じだったと思います。そう思うからこそ、わたしたちも、「小さいひつじ」の心情に共感し、「よい羊飼い」に見出されることを願います。

けれども、今日の福音書で主イエスが語られたたとえで、喜んでいるのは、「見つけ出された羊」ではありません。あるいは、「無くした一枚の銀貨」でもありません。「見失った羊」をようやく見つけ出した「羊の持ち主」です。「無くなった銀貨」をようやく捜し出した「銀貨の持ち主」です。この人たちは、その喜びを、友達や近所の人々と分かち合おうとするというのです。

不思議なことに、その喜びの輪の中に、「見つけ出された羊」は数えられていません。「見つけた銀貨」も数えられていません。実のところ、それは少しも不思議なことではないのかもしれませんが。「見失った羊」も、「無くなった銀貨」も、自ら持ち主に見つけ出してもらいたいとは思っていなかったかもしれないのですから。

それでも、「見失った羊」を見つけた「羊の持ち主」は、喜びを皆と分かち合おうとする、というのです。「無くなった銀貨」を捜し出した「銀貨の持ち主」も、喜びを皆と分かち合おうとする、というのです。

主イエスは、このたとえを、食事の席でお語りになりました。その席に、主イエスは「徴税人や罪人」をお連れになっていました。人々は、それを非難して言いました、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と。こんなことを目の前で言われて、主イエスがお連れになった者たちは、居心地が悪かったかもしれません。少しも喜ばなかったかもしれません。けれども主イエスは言われるのです、「悔い改める一人の罪人については…大きな喜びが天にある」と。「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」と。

## あなたと一緒に食事を！

主イエスを非難した人々は、納得したのでしょうか。主イエスが連れてきた「徴税人や罪人」は、その罪を悔い改めて償った上で、その食事の場にきたわけではなかったでしょう。「徴税人」は徴税人のままであったし、「罪人」と呼ばれた人の「罪」が赦されていたとは、だれも考えていなかったはずで、だからこそ、彼らが食事の席にいることを見て、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と非難する者があったのです。

それでも、主イエスは、彼らのことを「悔い改める一人の罪人」と言われました。それは、彼らが、主イエスの呼びかけに応じて、食事の場にやって来たからでしょう。食事の席に共に着く者となったからでしょう。

わたしが育った母教会では、日曜日にほとんど休みなく「ランチサービス」というのがありました。元々は、戦後の教会で宣教師夫人が始めたことでしたが、婦人教職が引き継ぎ、さらに有志の奉仕者が受け継いでいました。準備された軽食が150円で食べられるということで、中高生や学生にはありがたいものでした。中には、礼拝が終わったところにやって来て、この「ランチ」にあずかろうという者もいましたが、それを咎めるような者はありませんでした。それは、決して手の込んだ食事ではありませんでしたが、多くの者を教会の交わりの中に呼び寄せていたのは確かでした。

コロナ前、毎週礼拝後に開いてくださっていた「コーヒータイム」は、ようやく月一回のペースで再開されました。月一回となったのは、奉仕者の都合がつかないからだそうです。牧師の本音を言わせてもらえば、できれば毎週でも開いてもらいたいのです。有志奉仕者のチームが許してくだされば、わたしが準備と片づけをしても構わないとさえ思っています。確かに「コーヒータイム」は、食事ではありませんが、多くの方が相互の交わりを始めてくださる貴重な場なのです。

実のところ欲を言えば、礼拝出席者だけを対象に限定するのではなく、だれでも歓迎の「無料オープンカフェ」にできないかという夢もあるのです。皆さんは、賛同してくださいますか。主イエスならば、賛同してくださるのではないのでしょうか。「徴税人や罪人」を食事の席にお連れしたお方です。彼らは、「徴税人や罪人」でしたから、安息日の会堂礼拝には出ていなかったでしょう。出ることを許されていなかったでしょう。それでも、主イエスは彼らを「安息日の食事の席」に招かれたのです。食事を一緒にされたのです。彼らのことを「悔い改める一人の罪人」と呼ばれたのです。

わたしたちも、そうして見つけ出され、教会の交わりへと導かれてきました。「あなたを見つけたから、来てほしい」。そうやって一人の人をお連れすることのできる場を、交わりを、教会はつくってきたのです。